大事を思ひ立たん人は

大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかからんことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばし、このこと果てて、同じくはかのこと沙汰しおきて、しかしかのこと、人の嘲りやあらん、行く末難なくしたためまうけて、年ごろもあればこそあれ、そのこと待たん、ほどあらじ、もの騒がしからぬやうになど思はんには、えさらぬことのみいとど重なりて、ことの尽くる限りもなく、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう、人を見るに、少し心あるきはは、みなこのあらましにてぞ一期は過ぐめる。

近き火などに逃ぐる人は、「しばし。」とや言ふ。逃れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを、そのとき、老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情け、捨てがたしとて捨てざらんや。

（第五十九段）